



協働を目指して

共に学び合うこと

幼児教育を学び始めたばかりの頃、「子どもの遊びは学びです。子どもと共に自分も学び続ける教育者となりなさい。幼児教育の専門家としての誇りをもちなさい」の言葉は、まっすぐに受け止めた私の目指す教師像となり、私は、学生時代に幼児教育の専門家としての大切な学びを得たつもりでした。

しかし、この恩師の言葉の深い深い意味を、保育者となり社会に出て痛感しました。まず、「遊びを通して学ぶ」ということに対して「幼稚園の先生は子どもと遊んでいるだけでいいよね」と何人もの人から言われました。その度に「その遊びの中にどれだけのことが込められているか？」と思いつつも上手く伝えられず、そのように認識されることに悔しい思いをしました。これは「専門家」としてまだまだ未熟だったからです。

専門家になるにはどうしたらよいか。それには実践や研修を積み重ね、学び続けるしかないのです。「学ぶ」ということは、研修を受けることだけではありません。新しい情報を得るための文献を読むこと、新聞の記事から社会や地域の動向に目を向け、出掛けた先で体験し感じたことや目にしたこと、遊びの素材の発見や表現の幅を広げることなど、視点を変えると、日常の中に学びを得る機会はたくさんありました。

また、子どもたちによい環境設定が必要であるように、自分の目指す保育が展開できる環境の園に出会えたこともここまで私が保育を続けられた一つだと思えます。同じ思いをもった仲間と語り合い、お互いを認め合い励まし合い「子どもたちにとって何が大切か」という同じ方向を向いて進み、一人一人の保育者が自分のもっている力を発揮できる園に

出会えたことが、私を「専門家」として成長させてくれた一つだと思ひ感謝しています。もちろん尽きない悩みや、困難に苦しくなり、保育と違うことが経験できる場所を求め新しいことに興味が向くこともありました。そのように悩んでいる時は、立ち止まり考える時間が必要な時です。「自分が志したことをやり切ったのか。悔いはないか」と立ち止まって問い掛けます。そして私はいつも「ここでやるべきことがあるのでは」と答えを出し、新たな気持ちで子どもたちの中に入っていきます。それは「専門家」としてのプライドです。そうやって思い悩み考えることも糧となり次へのステップとなりました。

様々な経験を積み重ねると、その状況に応じた役割が出てきます。クラス担任としてだけではなく、新人の先生たちへの指導や助言、全体を把握して動いたり考えたり、高度な保護者対応など求められるものがどんどん増えてきます。保育以外の様々な知識や対外的なやり取りも必要となってきました。本当は一日中子どもたちの中で泥んこになって遊んでいたのですが、自分にしかできないことを求められ、その役割を果たすことも大事なことだと思っています。「責任が重くなる」と敬遠されがちですが、私は失敗を怖がらずまづやってみます。分からないことを知っていく喜びや楽しさ、出会い、知識、それらのすべてが自分の人生を豊かなものにしてくれると実感しています。

現在は、幼稚園から幼保連携型認定こども園へ移行して六年目です。三歳から五歳児の幼児期中心の保育に加え、0歳児からの乳児期にも携わるようになりました。乳児期における「遊び」は奥が深く毎日発見と驚きの連続です。これからも、子どもと共に心を動かす、子どもと創り出す毎日を面白がりながら学び続けていきたいと思ひます。

みふみ認定こども園 石戸 奈緒美

憧れの存在を目指して

私は、現在、矢板市にある認定こども園かしわ幼稚園に勤務しています。矢板市は、自然が多く、季節の草花や生き物にたくさん触れられる環境にあります。そこで、戸外遊びや散歩、植物の栽培や収穫など、その豊かな自然を取り入れ、子どもたちの実体験を大切にしながら保育を行っています。

私が新人だった頃を思い起こすと、日々の保育や行事など、初めてのことばかりで戸惑い、不安を感じるとともに、目の前のことに精一杯になり、見通しをもって生活していくことができずにいました。また、子どもたちを取り巻く状況は刻一刻と変化しており、教育に対するニーズなども変わっていつていくことを感じました。そして、未熟な自分の保育や保育教諭としての在り方に自信をもてずにいきました。その私を少しなりとも成長させて、保育教諭として子どもたちに関わっていきたいという気持ちを強く支えてくれたのは、我が園の取組でした。

まず、我が園では、教育目標を踏まえた教育課程や指導計画がしっかりと確立されています。時代の流れや幼稚園教育要領の改訂などに合わせて評価され、現場の保育教諭の声を取り入れながら改善されてきました。また、認定こども園へと移行した際にも、乳児の発達特性を踏まえた教育課程が新たに加わりました。この教育課程が明確であり、園全体で共有されていることにより、教育目標に向けて子どもたちをよりよく成長させていくとする指標となっています。日々の保育の中で、様々な時期の子どもたちの発達段階や具体的なねらい、内容などが明確であると、乳児期から幼児期への子どもたちの通る発達

の道筋がとても分かりやすく、新人であっても、経験者であっても共有できます。そして、教育課程を指針としながら保育を進め、子どもたちの教育の機会を保障していくためには、保育教諭一人一人の力が必要だということを痛感しました。

その保育教諭として自分の力を高めていくためには、研修を受けることの大切さを感じました。我が園では園内研修の一環として毎年研究保育を行い、子どもたちの発達段階に応じたねらいや活動の内容、環境構成や保育教諭の関わりなどを考慮しながら保育を計画、実施をし、自己評価と共に客観的な指導をいただいて改善点を見だし、次へと生かしています。継続して行っていくことで、自分の保育を見つめ直すことにつながっています。また、園外での研修にも参加させていただき、いろいろなテーマに応じて専門の先生方のお話を伺い、また、他の園の先生方の考えや取組などに触れることができ、とてもよい学びの経験をさせていただいています。園内外の研修を通して、アンテナを高くして、教育の質の向上を目指して更なる成長へとつなげていきたいと思えます。

新人の頃から、子どもたち一人一人の特性を踏まえつつ、また、教育課程を大切にしてきた先輩方の教育を引き継げるように、背中を見ながら続けてきました。しかし、経験を重ねてきた今も、日々反省をしたり、後輩の先生方と切磋琢磨しながら新しいことを学んだりしています。最近では、卒園生が保育教諭を目指している姿が見られます。大好きな先生の真似をして幼稚園ごっこを楽しんでいる子どもたちにとっても「幼稚園の先生」というのは、特別な存在なのだと思えます。その姿に喜びを感じつつ、憧れの存在として身を引き締め、これからも学び、成長していきたいと思えます。

認定こども園かしわ幼稚園

大久保 美文

辛い経験を乗り越えて

認定こども園で働き始めて十四年目となり、学年主任として日々保育に携わっています。時には仕事の大変さを感じることもありますが、今、職場の仲間と一緒に楽しく保育現場に出ています。

思い返せば一年目、初めて年少組の担任となり毎日悩みながら保育をしてきました。そんなある日、ベテラン保育者が私のクラスへ入り一緒に保育をしてくれた日がありました。すると、子どもたちはベテラン保育者の周りに集まりました。自分の保育の力不足を痛感しました。その時は、分からないことばかりで自信がなく、悲しみの感情でいっぱいでしたが、この経験があったことで「保育を学びたい」という意識が強くなったのを覚えています。

四年目には、初めて年長組の担任となりました。年長組の仕事量の違いや卒園に向けてのプレッシャーなどに押しつぶされそうになりました。しかし、卒園を迎え子どもたちを送り出したことにより、子どもたちの大きな成長を感じる事ができ、「保育のやりがい」を感じられるようになりました。

八年目に、初めて学年主任となりました。学年をまとめたり、担任の相談に乗ったりと、担任の時とは違う悩みを抱えて毎日仕事をしていました。学年主任になってからは、保育を客観的に見たり、職員の悩みを聞いたりすることが多くなったことで、子どもの育ちと保育者の成長の二つの視点で考えるようになりました。

ある年、若手の職員が退職したことがありました。その時にどうして辞める選択になっ

てしまったのかと考えるようになり、そのことがきっかけで「働きやすい職場づくり」ということを意識するようになりました。

振り返ってみると、子どものこと、保護者のこと、保育者のことなど、たくさん悩みを抱えながら毎日仕事をしてきたと思います。辛いことがあつて時には辞めたいと思つたこともありませう。しかし、今ではその辛く悩んだ経験があつたからこそ、社会人として保育者として成長できたと思つています。辛いことを乗り越えられたのは、職場の同僚や上司に相談することができ、悩みを一人で抱え込まずに済んだからです。誰かに話してみると解決できたことがたくさんあつたので、人とのつながりを大切にできたらいと思ひました。

また、働き続けている中で大切にしていることがあります。それは、子どもはもちろんのこと、保育者の間でも同様に、「相手の思いを受け止める」「自分も大切だけど相手も大切」ということです。子どもの成長を願つて保育するには、まずは保育者の心の安定も大切であると、今まで働いてきた中で感じました。仕事で悩んだ時には、お互いの思いを伝え合うことで、同僚性が高まり、働きやすくなるだけでなく、楽しみながら保育できると思ひます。私自身、仕事が楽しくなると、保育を学びたい、深めたいという気持ちが高まつていきました。長い年月が経ちましたが、この仕事をしていてよかつたなと感じていひます。

認定こども園あかみ幼稚園

久保 智美

人とのつながりを大切に

学校事務職員として採用されて二十数年が経ちます。今こうして仕事を続けてこられたのは、周囲の出会った方々に支えられ、本当に恵まれた環境だったからだと思いません。

私以外の同期の事務職員は一人配置校に採用されていたため、「いろいろ大変だ」という話を新採研修等で聞くことも多々ありました。しかし、一方で、どんどん仕事を吸収して覚えていく同期の姿が見られました。当時も今もそうですが、新採教員には新採指導教員がいますが、新採事務職員には指導者がいません。一人配置校勤務の事務職員は事務処理について校内で指導してもらうことが難しいため、近隣の学校の先輩事務職員に教えてもらいながら事務処理を進めていくという大変さが最初にあると思います。

私の新採としての勤務は、事務職員の複数配置校である中学校から始まりました。その勤務校にいる間に、私は二人の事務長にお世話になりました。仕事はもちろんですが、仕事以外にも、社会人として、学校事務職員として、常に隣で指導していただきました。些細な疑問や見当違いな質問などにもいろいろ丁寧に答えていただきました。ミスをしたときには厳しい指導もしていただきました。身近に指導してくださる方がいたという点では、恵まれた環境にいたと感じています。

当時、事務長のところには多くの先生方がやってきました。困った顔で相談に来る先生、雑談に来る先生など様々でしたが、事務長は忙しい中でもいつも直ぐに対応していました。解決策をいろいろ考え、先生方のためにPCを使って書類等を素早く作成し、時には脚立

を担いで修繕に向かうなど、ゆっくり座っている時間もあります。フットワークが軽く、ひたすら先生方のために、そして子どもたちのために、校舎内を走り回っていました。保護者や地域の方も事務室にやってきました。今思えば、「地域連携」のような役割を担っていたのかもしれない。そんな姿を傍で見せていただき、仕事に対する誠実な態度や責任感など、たくさんのことを学ばせていただきました。事務長は先生方からも地域の方からもとても信頼され、そしてどんな問題も解決に導いて、私にとっては事務職員の鑑のような存在でした。私も事務長のように誠実に仕事に取り組んでいこうと思いました。今でも尊敬する事務職員の一人です。年を重ねてもなかなか近付くことはできませんが…。

私が採用された頃と今とでは、事務職員を取り巻く環境もずいぶん変わってきています。共同事務の制度化、学校経営への参画、働き方改革など私たち事務職員への期待や求められるものも多岐にわたります。最近では、様々な採用形態の職員も増え、事務処理も煩雑です。そしてコロナ禍で学校での生活様式も変化し、先の見通しが立たない予測困難な状況でもあります。一人職種ということで大変なときもありますが、そのようなときは、いつも周囲の方々にお世話になっていきます。一人職種だからこそ、「人とのつながり」がとても大切だと感じています。

学校では、日々、子どもたちから元気やパワーをもらっています。その未来を担う子どもたちのために何ができるのか、今の私たちにできることを考えながら学校経営に参画し、事務職員として時代の様々な変化に対応していけるよう、これからも「人とのつながり」を大切にして、たくさんの方と出会い、共に学び、成長していきたいと思えます。

野木町立南赤塚小学校 鈴木 智美

ささやかだけれど大切にしたいこと

「すごく、うれしかったです」

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、全国的に学校が臨時休校となった二〇二〇年三月。担任していた六年生四クラス百三十八名の子どもたちはどのような思いでいたのでしょうか。自分たちの卒業式は、もしかしたらできないのではないかと考えていたかもしれません。しかし、在校生はいなくとも、教職員の温かな語り掛けの言葉と保護者の愛情あふれる拍手に包まれ、卒業証書を手にする事ができました。式が終わり、教室に戻ったからの子どもたちのこの言葉には、喜びに満ちた本当に「うれしい」気持ちが表示されていました。そして、「大人は、大変な状況でも自分たちのことを思って動いてくれるのだ」と感じたことを話してきました。

子どもたちに「大人になるのもいいものだ」と思ってもらいたいです。学校で一番身近にいる大人は私たち教職員です。学校は、私に多くの子どもたち、そして多くの同僚であり仲間であるすばらしい大人とも出会わせてくれました。

今、目の前にいる子どもたちにもどのように育ててほしいですか。毎日をどのように過ごしてほしいと願っていますか。友達と仲良く、笑顔で、元気に、思いやりをもって、挨拶ができて、それから一生懸命学習してほしい。様々な思いが浮かんでくることでしょう。笑顔いっぱいの子どもの仲良しな学級や学年をつくりたいなら、学年の先生方いつも仲良く笑顔で話そう。何事にも全力で取り組む学級・学年にしたいのなら、私たちも全力で。挨拶ができる子どもたちにと願うなら、毎時間、教室に入るたび「こんにちは」。ほかの

クラスに入るときも「こんにちは」。ずっと朝から一緒にいるからしないのではなく、いつでも、当たり前前に、何度でも、気持ちのよい挨拶を。出会った子どもたちと共に過ごせる時間は限られています。だから、いつでも意識的にしていくことは大切です。

学年を気遣い、学年で協力する。今日、学級であったこと、子どもたちの楽しい言動やうれしく思った出来事、気になることを学年の先生方と共有することを大切にしていきたいです。

ただ漠然と「いい先生になりたい」という思いで、これまで夢中でやってきた自分の学級づくりや学年の先生方、子どもたちとの在り方についてですが、子どもにとつて「いい先生」とは、どんな先生なのか改めて考えてみました。授業が面白い、分かりやすいというのはもちろんありますが、「先生は、クラス全員をかわいがってくれる、大切にしてくれる」と子どもたちが自信をもって言えるかどうかだと思います。これまでに出会った先輩や同僚の先生方の素晴らしいところを吸収し、本で得た知識をどう実践につなげるかを目の前の子どもたちの表情や言葉をもとに、自分なりに考えながらやってきました。私がこれまで受け取ってきた多くの先輩からの貴重なメッセージをしっかりと次に渡してつなぎ、その知恵や工夫を惜しみなく共有していければと思っています。

どんな世の中であっても、前を向いて笑顔で子どもたちと向き合うみなさんの毎日が、もっともつと輝くことを願っています。

さくら市立氏家小学校

吉永 恵

同僚性で校務分掌をよりよいものに

年間指導計画、学習の手引き、テスト、通信票、とちぎっ子学習状況調査…。初めて学習指導主任を担当することになった四月、ひたすら文書の作成・印刷・配布に追われ、なんて面倒な業務が多いのだろう、と困惑したのをよく覚えています。四年間学習指導主任を務め、今年度は他の校務に移りましたが、そうなる少し足りないような気がしてきました。「面倒」から「やり甲斐」に転じることができたのは、ひとえに周囲の先生方のご協力があったからにほかなりません。

中学校は教科担任制のため、自分が担当している教科以外は見えにくいところがあります。そこで本校では、とちぎっ子学習状況調査や授業改善に向けての分析を全教員で行うことにしています。すると、今まで気付かなかった生徒のよさや課題、改善へのアプローチ等、アイデアが次から次へと湧き上がり、絞り込むのが大変なほどでした。多くの先生方に協力してもらおうことになりましたが、学習指導主任としての業務を円滑に進めることができました。そうして設定した課題解決のための具体策に全職員が同一歩調で取り組んできたところ、確実に生徒が変わってきたという手応えを感じることができました。

また、学習指導を担当して二年目から、中学校区内の三小学校の学習指導担当者との連絡会議を定期的に行うことになりました。それまでも中学校区での乗り入れ授業は行っていました。そこでは気付くことができなかった小学校と中学校の違いをたくさん学ばせていただきました。この会議を通して、ノートの形式や学習規律の統一、児童生徒の共通の強み・弱みと課題の確認、小・中での家庭学習の在り方や方向性の確認などをしました。

三小学校で共通で実践されてきたことが基となっていて、生徒は中学校入学後の学習にスムーズに移行できるようになっています。これも一人では思い付くことも実践することもなかったことであり、様々な提案をしてくださった小学校の先生方に感謝の思いでいっぱいです。これは余談ですが、始めのうちは正式な会議ではなかったのですが、なるべくお互いに負担が少なく済むよう、夏休みにランチミーティングの形をとるなど、フレキシブルに行っていたところ、会話が弾み、より互いの校種への理解が深まったように思われます。

校務分掌として自分に割り振られた業務とはいえ、一人で全責任を負ってやらなければ、と思う必要は全くないと思います。むしろ様々な意見をいただくことで、相乗的な力や効果を生み出すことができるのではないかと思います。周囲には自分にはない様々な経験やアイデアをたくさんもった先生方がたくさんいらっしゃいます。その様々な意見を集めていくことがよりよい教育活動につながると思います。

これまで四校で勤務させていただきましたが、どの学校でも先輩や同僚に恵まれ、たくさん学びがあり、成長しながら充実した毎日を過ごすことができました。経験年数が長くなり、多少助言できることは増えましたが、今も学ばせていただくことばかりです。これからも、周囲の先生方との同僚性を大切にしながら教育活動にあたっていきたいと思っています。

上三川町立明治中学校

宇都木 香緒里

学級担任が受け取るもの

今年度で教職二十七年目を迎えることになりました。自身の経験で周囲と異なる点といえば、勤務校の数が多いことです。臨時採用を除いても現在の勤務校は八校目、一校あたりの勤務年数は四年に満たないことになりました。教員としてのキャリアは、へき地校や小規模校での勤務が多く、地域の少子化に伴う学校の統廃合による閉校にも三度ほど立ち会うことになりました。最初の八年間は小学校の勤務、残りの十八年余りは中学校の勤務です。その中で二十三年間は学級担任をさせていただくことができました。このように話すと、大抵、「異動が多くて大変ですね」という反応が返ってくるのですが、自分自身は得がたい経験をたくさん積ませていただいたと考えています。

一年間の臨時採用を経て、教諭として最初に赴任した小学校は、上都賀郡の北部にある小中併設の学校でした。担任したクラスは八名ととても少なかつたのですが、学年をまたいで様々な活動を実施していたため、子どもたち全員に全教職員が関わっていくという姿が自然にありました。

次に異動したのは芳賀郡の小学校でした。統合により二校ほど勤務したのですが、どちらも単学級の小規模校でした。三校目の学校は当時としては珍しく、教職員の年齢構成が若い学校で、学級担任は全員二十代から三十代前半、互いに学級経営についてアドバイスをしながら、新しいことにチャレンジする気風にあふれていました。

四校目の勤務校は、別の町の中学校でした。中学校の勤務は私にとっては初めてで、戸惑うことも多かったことを今でもよく覚えています。特に困ったのは教科指導と部活動指

導でした。小規模校で自分以外に同じ教科の教員はいない状況。教材研究には熱心に取り組んだものの、思い返せば拙い授業を続けてしまったものです。部活動も未経験の格技、外部指導者の助けを借りながら何とか運営することができました。授業も部活動指導も、何とか形になったのは、生徒の協力のおかげ以外の何ものでもないと思います。もし、自分自身にやる気がない状況があれば、生徒は敏感にそれを感じ取り、頑張ってくれなかったかもしれません。

その後、郡内の中学校への異動を挟み、六校目の異動は大学の附属中学校でした。不安はやはり教科指導。ここでは経験豊富な同僚の先生方の知見に触れ、自分自身の研修を深められたように思います。学校の性質上、年に何度か公開の研究授業がありますが、先輩の先生方に言い含められていたことがありません。それは、担任するクラスがあると生徒が助けてくれるというものです。最初は意味がよく分からなかったのですが、公開授業ともなればいつも以上に準備をして臨むものです。そういった意気込みや熱意が伝わるのでしょうか、生徒たちはよく考え活発に意見を述べてくれるのです。多分、錯覚なのだと思います。授業が上手になった気がしたものです。

その後、現在の町に異動して、勤務は二校目になります。四年ほど前から担任を外れて学年主任をしています。やはり学級担任には学級担任にしか味わうことのできないやり甲斐があったと感じています。それは教師の熱意に応える子どもたちの頑張りを直接受け取れることだと思います。学年主任をしながら、若い先生にそんな経験をたくさんしてほしいと考えています。

茂木町立茂木中学校

堀口 勲

仲間と学校事務職員の未来を描こう

二〇一七年に学校教育法が改正され、事務職員の職務規定は「従事する」から「つかさどる」に変更されました。この改正で注目すべき点として、これからの事務職員は、事務の執行に関わる業務を担う者から、事務を計画し、その実施過程を管理する業務を担う者へと変更になった点や、すべての事務職員を学校経営への参画職として位置付けていくという方向性が明確に示された点が挙げられます。また、同年に地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正によって、制度化されたのが「共同学校事務室」です。事務の共同処理の実施に係る責任・権限関係の明確化、共同学校事務室でのOJTの実施による事務職員の育成及び資質・能力の向上など、事務処理の更なる効果的な実施や事務体制が強化され、学校経営における学校事務の果たす役割の大きさと、主体的、積極的に参画する事務職員の職能は、これまで以上に期待されることになりました。

さて、多くのベテラン事務長の方々が定年退職期を迎えています。これまで数多くの実務や実践経験を積み重ねてこられた力量を、一つでも多く後輩へ引き継いでいただきたいと考えていました。事務職員は多くの学校が単数配置であり、他の事務職員の日常的な仕事の様子を見る機会が限りなく少ないので、先輩から学ぶことが難しいのが現実です。そこで、地区の研修会にて多くの方々に、先輩事務長講話や実践事例を紹介する活動を実施しました。エクセルの活用を得意とする人、法規に精通している人、先生方とのコミュニケーションを大切にしている人など、個々に得意、不得意なこと、また、日常的に意識していることや、信念を強くもって勤務していることなどを、活動を通して知る機会とな

り、私は自らの力の無さを痛感することになりました。もっと早くこのような研修活動を実施していたら…と感じています。

これからは、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職として、段階的な知識や技能を習得し、専門性を高めるための、事務職員のキャリア形成が重要になります。特に、経験年数の浅い事務職員は、五年後、十年後の自分がどのような事務職員になりたいのか、意識して思い描くことも大切です。自分一人で学び、仕事上で直面する課題を乗り越え、高いレベルの仕事をしている人もいるでしょう。しかし、すべての事務職員がその高いレベルの仕事に到達することは難しいと思います。

ですから、複数の事務職員を同一の事務組織のメンバーとして捉え、事務職員が分担・協力することで、総体として高いレベルの仕事を遂行することができる、共同学校事務室での活動を通して、事務職員のキャリアアップを図り、身に付けた力量を学校現場で発揮することが必要だと思えます。さらに、地区・市町の事務研究会と連携することで、その成果も上がることが期待できると考えています。

ベテラン事務職員と経験年数の浅い事務職員が、互いに学び合い、切磋琢磨しながら協働し、学校経営に主体的、積極的に参画できる事務職員として、期待に応えることのできるよう、資質・能力の向上を目指したいです。そして、すべての事務職員が「つかさどる」にふさわしい職務を担っていく姿を、私は未来の学校事務職員の姿として描きたいと思えます。

那須烏山市立烏山中学校

大森 健史

経験は宝物

私が初めて赴任した学校は、通勤時間が三十分程度の中学校でした。初めての教師生活、教科指導、学年所属、部活動顧問等、社会人一年目の私にとって分からないことばかりでした。しかし、生徒や保護者との接し方、コンピュータの使い方や社会人としてのマナーや常識、礼儀作法に至るまで、本当に何も分からない私に、先輩の先生方は丁寧にかから教えてくださり、地域・PTAの方々も温かく支えてくださいました。私はこの中学校で、「教師」としてのノウハウや信念を学ばせていただき、大切に育てていただいたと実感しています。

校務分掌も、様々な役割を担当させていただきました。初任校である中学校では、初めは副担任として勉強できる期間をいただきました。それから、二年目、三年目となるに従い学級担任や、主任となる分掌を担当したのですが、今思えば、段階を踏んで経験を積めたことが、少なからず自信につながり、今の私を動かしているのだと思います。たった一年しか経験できなかった係分担任、長年携わった分掌等、担当したものは様々ですが、そのすべてが、今の自分の幅を広げてくれるものになっています。

しかし、誰もがこんなふうには思わないでしょう。初任一年目から学級担任を任せられ、多くの校務分掌を抱える先生方は、たくさんいらつしやいます。私自身も、忙しい日々の生活が苦しくて、あふれる仕事に押しつぶされそうになり、「もう嫌だ」と感じた時もありました。そんな時は、どうすればよいのでしょうか。

実は、周りの多くの方々に、私は支えられてきたのです。きっと先生方もそうでしょう。

まさしく「チーム学校」です。教師を一人にしない、支え合いながら仕事ができる、望ましい職場の環境があります。そして、もし困ったことに直面した時は、先人たちの声を聞く、その分野を追究してみる等、多くを知り、経験することが必要なのだと思います。

また、その困ったことを解決するには、いわゆる「研修」も、その手立ての一つです。「研修」のよさは、自分の知識を深めたり、技能を向上させたりすることだけではなく、様々な意見を聞き、自分の経験を広げられることだと私は思っています。多くの方々と意見交換できたり、よく分からなかった内容を理解できたりすると、そこから安心感や自信が生まれ、自身の意欲や活力が強化されます。自然と答えが導き出されることもあります。自分のやるべきことが見えてくると、達成感も味わえるようになります。さらに、研修等を通して知り合ったとしても、自分なりの成長が感じられるはずで、さらに、研修等を通して知り合った仲間たちは、人生における財産です。悩んだ時、どうにもならなくなった時は、仲間たちに助けを求めることができます。時には、同じ職場ではないからこそ言えること、教えてもらえることがあります。

落ち込むことがあってもいい。人間そんなに強くない。失敗を失敗のままにせず、挑戦していくことが大切。「為せば成る」亡くなった祖母からの言葉ですが、教師になって改めて、私はこの言葉を自分なりに解釈し、モットーとしています。教師も一人の人間である以上、弱さもあるし、未熟なところもたくさんある。しかし、望ましい姿を求めて前向きに生きていくことこそ、子どもたちに堂々と胸を張れる「教育者としての姿」なのではないかと思うのです。

佐野市立常盤中学校

前田 和代

不器用だと思えば

私は、特に迷いがなく、自信をもって仕事に取り組んでいる方に対しては、参考になるようなことを書くことはできません。しかし、かつての自分がそうであったように、仕事に自信がもてず、何が自分の特徴なのかを探して苦労している方のためであれば、私の経験（と言うより考え方）をお伝えする意味があると思います。

さて、この度「学校経営」というテーマでの執筆を依頼されました。現任校で教務主任七年目を迎える経験を買われていることと思いますが、まだまだ力不足の私にはとても学校経営をしているなどという実感はありません。この六年余りの中で、新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの入学者選抜や一日体験学習などの行事の計画・実施、それらと並行して新教育課程編成作業やGIGAスクール構想及び新校務支援システム移行対応などを進めなければならず、「経営」と言うよりは「運営」に終始しているという実感です。それでも、学校が大きな変化への対応を求められるこの時期に、教務主任として無事にこれまで乗り切ることができたのは、二つの、自分ならではの要因があったからだと思っています。

一つ目は、物事の飲み込みが悪く、物覚えも悪いことです。

私はどうも飲み込みが悪いらしく、新しい仕事の見通しを立てるのが苦手です。さらに、物覚えも悪いために、新しい仕事でなくても「去年こうだったな」と思い出すことができないことが多々あります。仕方がないので、こんな自分でも分かるようにと仕事の流れをまとめる癖が付きましました。言うなれば自分自身のためのマニュアル作りです。結果的に、

この癖がコロナ対応において生かされたと感じています。とにかく行事の運営がこれまでどおりにはならないことばかりですので、細かな仕事であっても作業を想像しながら流れを紙一枚にまとめ、それをもとに先生方に個別に仕事をお願いするようにしました。個別にお願ひすることでその場で問題点を指摘されることもあり、マニュアルの改善にもつながりました。

二つ目は、自分に得意なことがないことです。

教員としての経験を積み重ねていく中で、生徒指導や進路指導あるいは学習指導や部活動指導において、自分よりはるかに優れた能力を発揮している先生方に出会い、自分には得意なことがないと感じるようになりました。おかげで、変にプライドをもつこともなく、誰に対してもどんなことでも質問したりお願ひしたりできるようになりました。自分の役目は周囲の先生方に能力を発揮してもらおうこと、そのための場を設定したり人をつなげたりすることだと思っています。周囲の皆さんのおかげで仕事ができるようになっていく、そう感謝しながら仕事に取り組むと、自分の能力以上の働きをすることができるようになります。私にとって「感謝の気持ち」がすなわち学校を動かす「てこ」の働きをしてくれそうです。

二つの要因は、簡単に言えば不器用さであり、言うまでもなく短所です。しかし私はこの不器用さを克服しようとすることで自分らしく仕事ができるかと考えています。ですから、もし自分を不器用だと思ひ悩んでいる方がいたとしたら、それは自分次第で長所にするこ

気付き、輝く

壬生高校着任と同時にJRC部顧問となったことで、私は地域と関わる運命のルールに乗った。JRC部のボランティア活動は決まって週末だ。毎月一回土曜日に開かれる「あじさいサロン」は障がい者のための余暇レクリエーションだ。部員は準備や片付けなどの運営を手伝い、私は引率のため毎回参加した。当時まだ四才の息子を預けて休みの日まで仕事に出なければならぬことが苦しくて、最初の一年は前向きになれずにいた。

あるとき、自身の研修で就労支援施設に体験入所をする機会があった。障がいのある方とうまくコミュニケーションが取れるだろうかと不安を抱えながら門を叩いたのだが、何とそこには「あじさいサロン」で見た顔ばかりが並んでいた。さらに驚いたのは、皆が私の名前を覚えていたということだ。利用者の名前を覚える気もなかった私を、仲間として受け入れてくれていたと気付き、衝撃が走った。いつまでもぐずぐずと前向きになれない自分を恥ずかしいと思った。心を入れ替えるきっかけとなる忘れられない出来事だ。気持ちが前向きになると、自分の役割について考えられるようになった。生徒の様子もよく見える。知り合いが増えるとその日が楽しみになり、自分の中で「ただの引率」を卒業することができた。

では、生徒はどうか。ボランティア活動に積極的に参加しようという気持ちのある壬生高生なのだが、私は物足りなさや可能性の両方を感じていた。現地では懸命に与えられた仕事をこなしているのだが、生徒の様子を見ると、もっと次につながる気付きや新しい発想が生まれてくるようなボランティア活動にできるのではないかと考えるようになって

ていた。

二〇一九年十月、台風十九号が猛威を振るい栃木県各地に甚大な被害を及ぼした。壬生町社会福祉協議会より、栃木市の災害ボランティアに壬生高生も参加してもらえないかとの誘いを受けた。有志生徒と共に現地に赴いたのは台風から一か月後だったが、その爪痕は生々しいものだった。住宅の襖や障子、床板はすべてはがされ、基礎が見える骨組みだけの状態。生徒は泥かき作業をしながら、「みんなどこで生活しているのだろう」「お年寄りには大変な作業だが、手伝う者はいらるのだろうか」と住人を気遣う様子が見られた。高校生の学びの機会になればと、被災翌日の記録写真を見せてくださった。泥水が庭一面を覆う様子を見て、「静かで小さな川なのに氾濫すると恐ろしい」と驚きを顕わにした。

壬生町からは多くの大人のボランティアが参加しており、本校生にスコップの使い方を指南するなど温かく支援してくださった。六十代のあるボランティアの方から、若い人が来てくれるのはうれしいし、力になると言っていたことは生徒にとつて励みになった。生徒たちが事後に寄せた感想には、「人の役に立ててうれしかった」「作業はきつかったが、住民の大変さを思えば比ではない」「ありがとうと感謝され、やってよかった、また来たい」など前向きな言葉ばかりだった。生徒が新しいものに出会い、感じ、気付きを得る瞬間に立ち会えたことに感動した。生徒の成長を間近に見て、教員の使命を改めて感じるよい経験となった。

私たち教員は、生徒が新たな気付きを得ながら成長していく機会を作ることのできる幸せな役割を担っていると考える。これからも、生徒の目がきらりと光る瞬間を見るのが楽しみでたまらない。

県立壬生高等学校

石川 友紀

やればできる！

昨年度二十年目研修を終えて、改めて自分自身の教職生活の足跡を振り返りました。私がこの二十年の教職生活の中で力を入れて取り組んできたことは、教科指導はもちろん、保健体育科の教員ということから部活動の指導です。また、教員として生徒たちが成長していく姿を間近で見守り、夢の実現のために少しでも近くで携わりたいという思いから、毎年担任を希望して日々生徒たちと共に過ごしてきました。時代とともに変化する教育の在り方や生徒の実態に応じた指導は、頭を悩ませることもたくさんありましたが、やりがいや充実感のほうが大きく、教師としての私を一回りも二回りも成長させてくれました。しかし、校務分掌に関しては、特に意識してきたことはなく、与えられた仕事を円滑に遂行できるように関係職員と連携を図りながら取り組んできただけです。そのため、今回このような先輩教師からの校務分掌に関するメッセーの依頼を受けた時は、正直書くことが何もないと思ってしまいました。こんな私の経験談なので、参考にならないかもしれませんが、気楽な気持ちで読んでいただければ幸いです。

私は、先ほども書いたとおり、校務分掌に関しては自分で選べるほどの特化した能力をもっていないため、せめて依頼された仕事は断らず何でもやろうと、初任の時から心に決めて職務に当たってきました。しかし、一度だけ躊躇したことがあります。それは、前任校でカリキュラム・マネジメント推進委員会の委員長を依頼されたことです。カリキュラム・マネジメントの充実を図るためには、学校の教育目標を踏まえながら各教科の教育内容を相互の関係で捉え、教科等横断的な視点をもたなくてはなりません。保健体育科の私

には向いていないという固定観念があり、初めて断ろうかなという迷いが生じました。しかし、委員の先生方と協力すれば新しいものを構築することができるかもしれないと思い、委員長を引き受けることにしました。期待どおり、才能あふれる委員の先生方や同僚の先生方の協力を得て、私一人では思い至らなかつた発想力で現職教育の企画立案やグラウンドデザインや単元配列表などを作成することができ、最終的に研究成果を発表することができました。この経験から、全職員が協働的な関係を構築することができれば、その活力が学校全体の組織の活性化につながるというのを改めて実感しました。何かを作り上げるためには、様々な意見を集約し、調整しなければなりません。その前提としてあるのは日々のコミュニケーションを通じた教員間の協働だと思えます。打ち合わせや会議の場だけでなく、普段の何気ない会話の中から素晴らしいアイデアが生まれることもあります。そのため、私は日頃から同僚の先生方とのコミュニケーションを大切にしています。また、今回新しいことにチャレンジし、得た経験は教員としての資質向上につながったと自負しています。みなさんも、自分の得意分野を伸ばすことも大切ですが、自分自身で限界を決めてしまわず新しいことにもチャレンジし、同僚の先生方と協働しながらよりよい学校を構築することができきるキーパーソンとして今後大いに活躍してください。

私は、この四月の定期異動により三校目となる学校に赴任しました。この新しい出会いをきっかけに、また新たな自分を発見し形成できるように生徒とのふれあいや先生方との交流を通して、今自分にできることを模索し、生徒にとって何が必要なかを考えながら日々奮闘しています。みなさんも自分自身の可能性を信じて、夢と希望をもってこれから教育活動に邁進してください。

県立さくら清修高等学校

久保田 由佳

進路指導を通して

進路指導を担当するようになり今年度で七年目となりました。その間に三百名近い生徒が高等部を卒業して社会に出ていきました。そのときは最善であると思っていたことも振り返ってみるとうまくいった生徒ばかりではないことは確かです。思い出してみると、そのときにもっと本人とコミュニケーションをとったり、周りの方（関係機関等）の意見を聞いたたりしておけばよかったと思うこともあります。また、在学中にもっと指導できたことはなかったかと考えることもあります。そのようなことから学んだことが、「コミュニケーションの大切さ」と「キャリア教育の視点」「周りの人たちへの感謝」です。

一つ目は「コミュニケーションの大切さ」についてです。進路指導の仕事は、校内の関係する先生方と連携することはもちろんですが、外部の方々と話をしたり、連携を密にしたりしないと先に進まない問題が多々あります。そのとき、自分一人で解決するのではなく、どのように周りの方（関係機関等）の協力を得るとよい方向に進むかを考えるようになりました。自分一人ではできることに限界がありますが、周りの方と協力することで、一人で行うよりもよい結果が得られることが経験から分かりました。

二つ目は「キャリア教育の視点」です。進路担当者として外部の方と話をすると学校教育のヒントとなることを得ることができません。私は、外部の方との話の中で、「社会に出たときに必要なことは何ですか」と質問しています。それぞれ答えは違いますが、意見として多いのは、「挨拶、返事ができてほしい」「仕事に意欲をもつてほしい」という二点です。話を通して、仕事の技術や技能よりも社会人として当たり前なことをできることの

方が、社会からのニーズが強いことが分かりました。これらのことを生徒たちに伝える際に、「会社の人から言われたから」や「できた方がいいから」という理由だけで指導するのではなく、それがなぜ大切なのか、なぜ必要なかを教え、考えさせることや、学んだ（学んでいる）ことが将来にどのようなつながっていくか、ということを意識させることが重要であると分かりました。そして、これこそが「キャリア教育の視点」でした。それまでは、キャリア教育というと、何か特別なことをするというイメージがありました。が、何気ない普段の指導が児童生徒たちの将来につながるということを教師も意識し、児童生徒たちにも将来につながるイメージをもたせるような指導をすることが大切だと分かりました。

三つ目は「周りの人たちへの感謝」です。前述したとおり、自分一人では、できることに限界があります。仕事だから手伝ってくれるのが当たり前というのではなく、一緒に仕事をしたからこそ、よりよい仕事ができたと考え、一緒に仕事をした同僚や関係機関の方々に感謝の気持ちをもつようにしました。また、気持ちをもつだけでなく、積極的に伝えることで、円滑に仕事が進められ、連携がより密になることが分かりました。今後も積極的に感謝の気持ちを伝えていきたいと思えます。

以上の三点が、私が進路指導の担当者として学んだことです。これらのことは、どの職場においても大切なことであると考えます。これらのことを胸にこれからの教員人生を歩んでいきたいと思えます。また、これらのことを気付かせてくださった関係する方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

県立那須特別支援学校

川俣 卓也

同僚性を高める

人間関係が良好で居心地のよい学級集団だと、一人一人に頑張る気持ち生まれ、集団で何かをすることが楽しくなり、学習への意欲も高まります。このように学級経営の充実を図ることが、子どもたち一人一人の成長に大きく関わっていると実感している人は多いのではないのでしょうか。

同様に、同僚性の高い職員集団は、教職員一人一人の意欲により影響を与えます。「あの先生と一緒に働けてうれしい」「私もあんな先生になりたい」という思いが仕事に向かう原動力となり、教職員としてのスキルアップにつながったという経験のある方も多いと思います。本冊子の内容にも、先輩教師との出会いが自分の成長につながったという経験が多く寄せられました。同僚性は、教職員の成長に大きく関わっています。

私たちは日常的に、同僚とコミュニケーションをとることで、意図せず多くのことを学んでいます。同僚との良好な関係を築き、共に学び合うことにより、高め合う職員集団に成長していきます。お互いに足りないところを補い合ったり、よい面を伸ばし合ったりすることで、教職員が働きたい学校、子どもたちが通いたい学校、さらには保護者や地域から信頼される学校にしていきたいものですね。

関係資料のご案内



「自分たちでできる研修ガイド」

栃木県総合教育センター
 栃木県幼児教育センター
 2016年3月



「学校におけるOJT 成功の鍵」

栃木県総合教育センター
 2020年3月